

とのない少年時代を過しました。そして私が16歳のとき新天地を求めて清水町の人舞に下りました」

「それじゃあまり佐幌時代はよい印象が残っていませんね。」

「この頃になって小学校時代の同級生に、会うことがなつかしく、思い出は尽きませんね。」

「幼ないときから不審に思っただに気にかかることがあるのですが、実はあなたがおられた附近にポツンと白木の7、8尺（2メートル余り）もあろうかと思われる墨で黒々と書かれた墓標があったのを誰かに詳しく聞きたいと思っていたのですが、ご存じでしょうか。」

「確かにありました。上杉よしの之墓と書かれてありました。」

「その方はどういう人なのですか。」

「開拓当時大木を伐採したとき自分の切った木の枝に打たれて亡くなった気の毒な人だそうです。」

そこで私も今までの謎が解けるほどと合点が出来ました。その墓標の主は明治33年から同45年前後の事故と思われるが、上杉よしのという人は佐幌入植者の記録にはなく、だれ1人として同人の身元を知っている人はない。恐らくそれ以前にも墓標はあった筈事故のあったときに其の場に建てられたが、何年かのうちに腐朽して倒れ遂に土と化した。其の間身寄りの人も現れることなく口伝いに伝わったと想像するほかはない。その後その土地を求めた人によって伝え聞いた物語りに感じ供養の塔として建てられたものであろうか。しかしその墓標は再度腐朽しないうちに姿を消してしまった。その辺の疑問がまだ解けない。今後も分らないで過ぎて行くかと思うと残念でならない。

（ 未 完 ）



松 元 正 盛 さ ん 屈 足 西 3 線 20 号 在 住

86 歳 (明 治 31 年 生)

昭和58年1月13日訪問 若原幸雄

私の生れは、鹿児島県贈於郡財部村です。明治35年5月13日、5歳の時、移住決意した両親に連れられて落合まで汽車で来た。それも工事用の貨車に乗ってです。石狩の国クシナイを経て一行9世帯は、日高山脈を越え新得に入ったのです。徒歩で山越えしたのだが、背負われたり、歩いたり、カタ雪の上を渡ったりしながら屈足19号西2線2番地に堀立小屋を建て入植したのです。

この地は、私共と同県同村の東郷実夫氏が60戸分の農場払い下げ受け、第1陣として9戸が初めて屈足の地に到着したのです。当時の地勢は、佐幌高台より眺めた屈足原野は、昼なお暗き原生林密生する未開の地でこれを見た2戸は、「われよく成すところにあらず」と移住を断念し帰郷した。

入植した屈足西地区は、ヤチダモの樹生盛んで、地味良好と思っていたが、意外にひどい湿地帯であり、柏林の東地を払い下げるべきであったと、親達は後日悔やんでいた。なおまた、この地は屈足発祥の地でありまして、当時の7名は次の通りなのです。

中 村 良之助 30 歳 池 上 和 蔵 上 原 善之助 (正 盛 実 父)

山 田 愛 助 (独 身) 西 田 末 蔵 安 楽 弥 市

宮 原 傳 助 (独 身)

小学校入学は明治37年7歳のとき、人舞基線17号にあった教育所へ入学、安楽、私、西田兄弟など4名で通学した。その年の内に屈足基線48番地に草小屋の仮校舎が建ち、次の年から人舞教育所々属、屈足教授場に転学した。当時の生徒数は20名だった。現在、当時の小学生で存命者は、若原新作さん(屈足幸町)だけと思う。明治42年、伊藤博文公の急逝に際し、現在立教寺の前身、説教所が元屈足神社の南側にあり、この法要に、生徒としてお参りした思い出があります。

次の思い出は、6年生の時の担任は、森本先生で、ある時、「公益、学校、建築など5つ程度の単語を入れて作文を作れ」との出題があって、これがかなりの難問でみんなが苦しんでいる時に、高橋義定は(故高橋重作、元農協組合長の弟)文才に優れ、容易に作文を仕上げたのには驚きました。今でも、その文章を暗唱しているのです。

ではその文章をいいます。「本村に農家を営める一家あり。主人は、甚だ公益心に富んだる人にして、学校建築の議起るや自から建築委員となりて、寄付金募集のことについて、四方に奔走し学校建築を完成せり」。全く立派なものです、小学校時代の懐かしい思い出の一つです。

明治42年迄、約10町歩を開き、その土地代金で3頭引きの出来るよう、耕馬3頭購入して鹿追へ移転しました。今の鹿追中学校の校庭を中心として約40町歩開墾しました。その開拓時代の少年の頃、野干草を刈り取るため、十勝川の浅瀬を歩き来していたが、ある夏の日、たまたま、夏季の大雨にあったので、人舞の7号迄の遠い回り道をし菅原で湿地を腰まで水に浸りながら、文字通り、葦原をこぐようにして、遠く暗く、淋しい道を、腹はへる、陽は落ちる、寒くなるし、涙の落ちる寸前の思いをして家にたどり着いた時の苦しんだ思い出は、今でも思い出す14歳頃のことです。

私と水田のかかわりですが、

大正3年頃人舞に水田を見学に行ったことはある、屈足でも、明治43年頃からの水稻の試作はあったようだが、私は鹿追に転出し、続いて鹿児島に帰郷、海軍へと、大正14年再び屈足に戻る迄不在でしたからその間直接のかかわりはないが、既に上川土功組合は設立されていた。大正11年には屈足地区で1300町歩の造田があったようだ。火山灰地の土壌もあり500町歩の水を満たすことも出来ず組合の運営は困難な状態であった。

父は馬の好きな人で、現在地の佐幌高台裾に住み、私は、湿地帯の造田に精を出し、雪解けを待って、風の冷たく寒い野づらに出るの造田作業です。島田鍬を使って1鍬、1鍬、原野の木の根、草の根を切りとり、それを低みに投げ入れ土地を平にしてゆく、切り株を掘り起こし、畦を造り、1枚4畝の方形水田を作るのに頑張りました。整然と見透しのできる田並には、道を通る人々から褒められたこともしばしばでした。それにしても泥炭水田のため足が股まで深くのめりこむものですから、タコ足の靱蒔機にすがりつきながらの靱播き、馬の腹までぬかる代掻き作業、チャカ、チャカ馬についてゆけず人馬一体の泥まみれの奮闘、あまりのつらさに、「鹿児島に居たらこんな苦労はしなくともよかったのに」とつぶやく妻。全く悪戦苦闘とはあのような場面をいうのかもしれない。それにしても、大正時代は全町的に造田熱の盛んな時代でした。そのような中で佐幌東1線4号、現在若原明義氏のあたりで流れ水を利用して、窪田音造さん(私と同年輩故人)が2~3反耕作したこともあった。

86歳になった今は子供達に呼ばれて、冬には南へ、夏には新得へと穏やかな生活を楽しんでいる。